



三河後風土記

七



三河後風去記正說大人王卷十三四

目錄

一神君信玄合作掛川城軍

一信玄遠盟秋山難儀

一信長計畧与淺井拵楯

一越前子箇山城攻并落城

附酒井石川力戰



一 信長帰陣

附 神君秀吉退口難儀

一 信長催位

一 神君再沛出勢

附 秀吉成立

一 神君再沛出勢



三河後風去記正説大全卷十三

神君信玄合伴掛川撤軍

終系信玄ハ今川氏美と亡きんを折を被りたり極とて工更して
東上野其妻不下知して小桑家の取合不働りめりて不依て氏康
自ら是を征せり討不参り 神君中退りたり氏美暗弱なり
武民悉く是を誹む依て止るを信玄是を打めん後去を別ハ
之河不迫死するれハ 公是を止め給大井川を隔てお互不依地其
去 公元よりを別をとりんと思召給首在早速沛回急なり
信云二万五千して後河一攻する氏美是を少く依りてけりよりハ
馳中敵ハんと三万女子余人して後河の薩揃ハ幅卒ハ出張者なり其
法は不陳と云信玄ハ曰是完原を揮出極子と何ふ不氏美出張

の由を少老臣と叫出し、急るより信玄殿向と申す。あつた、駿河内應の志、
尤馳加へんと思ふ、知ふ今ふ、互て一人の程、卒も来らば、歎く、我
氏と、若く謀らん、と、眉をひそめて、申す、山嶽、昌、京、列と
申す、某既、小人と池て、そ、極子と、何ふ、如、敵の陣、機、全、か、ら、し、と、承、り、一、言
將、小、は、信、貞、薩、嶺、山、八、幡、平、の、敵、小、向、目、せ、我、君、ハ、氏、志、ハ、陳、五、し
信、貞、も、と、妻、さ、せ、終、り、一、語、あ、り、て、氏、志、と、追、立、し、と、い、ふ、信、玄、大
小、信、貞、は、お、い、し、一、言、此、物、と、取、り、向、し、と、い、ふ、別、出、給、ハ、内、應、を、より
妻、志、り、信、玄、ハ、横、山、に、仰、り、信、貞、を、と、志、し、て、揮、去、り、今、川、先、掛、の
軍、勢、妻、我、い、ん、と、申、す、如、事、て、内、應、の、面、を、喜、ぶ、所、れ、て、追、退、す、氏、志、發、給、
五、物、も、五、取、り、所、(追、退、期、は、小、兵、清、右、史、と、初、り、て、悉、信、玄、隱、系
と、氏、志、の、人、殺、三、百、人、申、ふ、成、り、氏、志、は、(い、ひ、り、て、城、を、落、さ、し、り、は、時

一首、此、歌、有、申、こ、小、世、と、も、人、と、も、恨、ま、し、時、小、あ、り、ぬ、と、云、の、と、か、ふ、し、と
一、或、説、小、武、田、信、玄、駿、別、と、説、く、今、川、氏、志、と、保、川、子、あ、つ、た、と
志、て、七、波、山、家、小、出、し、と、い、ふ、後、七、波、山、家、を、出、し、越、川、の、城、小、入、り、
信、玄、礼、入、り、て、公、此、人、質、松、平、源、三、右、友、と、奪、取、九、大、小、信、を、別、を
申、せ、ん、小、原、義、亮、此、人、質、と、と、申、り、り、り、後、甲、別、の、侍、秋、原、孝、前、也
坂、本、武、藏、小、命、一、後、河、の、二、府、中、を、焼、き、と、い、ふ、焼、け、小、何、者、の、建、ん
甲、斐、も、何、大、信、正、の、本、儀、ハ、欲、小、後、河、の、甥、倒、を、見、ん、よ
と、い、ふ、花、山、の、城、小、は、小、原、肥、前、也、結、実、を、別、掛、川、小、朝、比、奈、傳、中、也、春
能、着、枝、小、朝、比、奈、河、也、宗、臣、奥、原、加、久、戸、久、一、色、小、其、皆、川、也、在、り、
等、指、筋、々、々、小、原、紀、前、也、方、分、氏、志、へ、使、し、中、々、ハ、比、奈、今、川、家
譜、代、の、共、夫、日、君、を、於、て、敵、内、を、仕、す、申、傳、小、不、義、の、以、跡、と、い、ふ、し、も

名不阿ふ川家下ふさあよひ後んより某の方へ出戦あは後夫の
先陣は武田勢が向て花白丸一戦して討死仕へし中居る氏三
浦と勢見合らるゝ如く引後て朝比奈留申るが苗楯の要害よく
武多無根不足なり苗楯へ入を後一死力を尽して後城はらり定て小糸
父子後落仕ひいんを時内運とて案毎後と云る氏三は大小悦びて
掛川一戦んとあふ時三浦云某は朝比奈と申意友は彼所一立戦は
必朝比奈の教をせんは後後と教ふと氏三はつて此の教を尤なる
まは世承り付のりては之は面を命大事なり此を何卒して助れ
と有る三浦はつてあはかりき以小糸氏康は元永禄三年六月陸后
志て利根を相討と号れそ子新九郎氏政家督たり終り信玄の言
より幸得三浦を後とてせりる氏三は信玄の甥なりとも生質悪

魯おし信好の若とあし一族不徒少し幸記沙は後を在古老の若
とも酒川家内兵一を列の城と酒川家大守を丸を後後
河をとも丸ん事必定と在代家小標丸んより信玄押込せんと
存早速攻めぬ之後た苗時氏政は信玄の誓の娘は死去り元國王
丸氏直正一丸んが孫丸ん小糸家小親し兼略を存と丸丸
少も富士郡内系と境と小糸家へさるるし此支死あ丸ん信ありと
お承る氏康開も河を志とつめ小お云せんと白三浦と標捕標
獄し火急不軍路信後して氏康氏政一万余勝を引率し永禄十
二年正月月中旬後河玉(後)向ありと三浦浦店と之等れ三枝橋小標
少を掛ら丸んまより八幡平由井蒲系と悉追却し三枝橋小標
陣と丸信言は丸ん大お若り信とを教丸ん後をへと丸んと山孫小

子方石馬海陸一山西のふと押させそ月ハ一万余人真津藤原
清見を人出張せ能たお陸のふと押させそ月ハ一万余人真津藤原
余を馬殿士率此是も指飛り城籠りりる在對陣して只一月
くハ追合あり甲別方ハ馬場内度美田小山田京ハ幡言飯等
小条方ハ小条常陸介口治松平頼朝三弟松田尾張守口肥後守村鹿
一居九治守頼朝大進守藤河守多目因防守荒川守後守成田下徳守
京式部守大守守小橋守中務守内度大和守大久保信俊守等
勢ハ小条頼朝武時頼朝と名乗て地質不緝部ハ旅一流を勢ハ
百斗撞撞ハ馬守押立させ一文字に走り
馬場内度ハ御とて頼朝也
貞ハ三やとてまき出あり小条
方より白地ハ及思付るハ旅ハ押立松田尾張守一康秀八百余騎中
切て出せしと押立花火水ハ向ハと構守る松田ハ後守此兵之跡頼朝

うハ出さ甲へき右様及頼朝進立り此方ハ小松守りりり備の指使
本ハ小松守云甲斐守と云思ひん返し命ハ思ふ程頼朝下達
討死を跡頼ハ放し喰ひ死し頼朝も討しこそ頼朝討死ハ
ぬも死しこそ信を思ひ守るるハこそ信を思ひ討死ハ
働して味方の名を此と仕出さるるハこそ信を思ひ討死ハ
け序ハ非ホと教さんと思ひ中頼朝某位別頼朝の語を城に傳所
大軍と存五百の兵四百騎強し百騎中出陣侍ハけ小松守
勝傍り軍勢と強合心元方一人ハ信守へしと信云曰
汝を物と強ハ在城させ上頼朝別敵又ハ元頼朝中の大敵と
頼朝守るハ信守ハ出陣ハ汝と百連るハ是武功の体ハ後
有ハ頼朝ハ及思付るハ向へしと信居頼朝ハ向なくまきと

下旬掛川城を攻め入りて所用乏者有る月五日城下を燒
拂ひ入りし由陣は翌十二年正月七日大軍引奉天王山陣
元あり

永祿十二年正月氏直密に久世八右衛門左衛門尉を立
付けしに
久世の一族は元以來旧好の者古の昔の淵源をたれ
ば、尚家一昧して日陷を極め裏切して是も又誰に依て
八右衛門左衛門尉を立付けしに久世澄隆が宗族を叔父澄正
宗光兄弟宗直久世依波等同日向す本間十右衛門持重が宗
も、澄隆の一族は元以來の書に五出りし所を中隊を元の時
へ、澄正の心を脱し変へたれ、追て掛川攻の時裏切して、澄
正と宗直の氏直の者、老ををさんたあり、一昧を判せし、

一族感おた、若し澄正久世の想、以て久世の宗族を
終る久世八右衛門等も、公に依りて出陣不及り分ちて、
中隊を導きし、由りしを伺ひ、抑る向す、家は悲願を
た、宗族の敵を連て、毒を、若し是を、集い、おん、
い、か、し、人、を、此、か、け、以、意、友、子、神、者、け、し、
宗族何心を陣中へ入りし、中宗族序を、見、澄、政、源、正、
日向、石、同心、あり、澄、正、と、口、此、極、小、ま、と、
見、澄、正、志、者、と、元、各、此、心、意、を、計、り、わ、け、て、
計、り、各、同心、の上、我、何、し、小、澄、正、と、忽、社、文、を、
見、澄、正、八、右、衛、門、左、衛、門、尉、を、立、付け、し、
宗族を、抑、る、宗、直、終、り、我、も、皆、病、死、と、
稱、し、久、世、の、城、小、川

終るへしと何れなく我を立家不埒の仗と死て久世佐後守中
間十左衛門と指寄て中々いし徳川公の命を以てより更儀有勇士と
て何れは事と云ふも各せざる日此一面今川を足限り徳川公へ
降参して今更何ぞ不義の志を搦んや依て徳川公へ仗と死ては
事と云ふせん終るに計り互知不向者必死せん目下命を
所辺出人の命を以て命を以て事と云ふは心と改め徳川公へ
君儀と云ふと云ふ人夫大に誇りきと今て院より宗徳後より我
不随はんやとある蓋し何れと云ふは口外と云ふは望めて
我々の中久世が涙を不依て加勢五百人ももき此宗徳の時勢は
お丸（入丸）佐後守十左衛門と招きつれく不仕れと中々いある人
八重の方（あは）つれくつて久世宗徳並ての巧いと徳川公（一）

をさうと申す此の八重守大に誇り終るに必討ち事らん先宗徳
君儀と云ふては後氏（一）涙をせしと者今人数二百五十人押
寄る機もあては悟れぬ矢炮を飛して防犯不たなり八重守
先小をすおとや沖の小艇何れの手あるん復兵急小も、破れ
て不知と云ふ俄に園の邑後より宗徳元亮の勇士二百余人
思ひもよみ切て掛るこはいふと終る久世佐後守中々い
係不園を揚て此守の中も十左衛門電光の如く此掛り久世宗徳
と云ふより其逆頼小切て後當時中同右幕
左馬守八百石に於て七人急死と云ふて討死を
八重守の情を以て死と云ふ此は未だ知らず小落矢なり
林君の酒井忠次と云ふ掛川の陣中へ思ひと云ふと一列久世
宗徳が申す如の敵陣にお詞と云ふ合て其を在門と云ふて

陣中此極子とす死傷り今晩の時中井兵渡り大將とす
六百余人渡松を渡り中井とす 公別其用意を令し終ふ
去程小由井の軍勢難前を破りて渡松の方へと敵軍不傷不圍
其声とありし其軍馬及と度り大久保七小由井同治左今有
此所と思ひ互曲其心と討死する位と交て我未見其為居る
向り志やの進むを討死れと叫ぶ由井大由井其軍之室敵の
計畧不陥入る只井破て城中一門返すと強つ返つた其く小
攻戦ひ百六十騎討死れ這て其陣と道と退と交不永樂通
室の旗一流さるとなびく水想想指右道と度不志
其のくし由井ハ血眼不敵て大右刀と振舞し南を奪ふ切拂
ひも陣と井破り小由井勝不討死るも強と由り今て進むと

進退れ又も中井其声あて大に度々其多の虚言戦ひ言まて軍
兵と進む包也必死不敵て切也此圍を破るありあはは徒卒
悉討死し又ハ落矣これも由井ハ其場と退む痛手流手十
二々不負い必死不敵て傷不不服の上の蜂此前立物と持て大久
保忠世一文字不強き強りしと密て切由井も大右刀ありし
百鞭子煉せり合しがす此後んを引纏て落す上不敵下不
敵りし痛手此由井終不討死を死言由陳中此由井の首を指
上る皆大不為小氏其是を皆誦り上りて服怒り我徳川の
為不交し死辱と泣くも皆聽不入て其を誰か我為不
は恥辱と云(ま)やと中其此道松丹渡寺を出入りし
古の猿も七日辱らり時ハ長死と云り今者我に夜討の者不

折て出十死一生に戦して敵を打敗るる戸を晒はる運の福徳令中
世は氏真大少佐に別命死を授けり去程不正月九三日の酉園の傍
井道松丹波を大羽とて松井右近忠次が陣中一忍考を奇しく
関一声揚と名を思ふ放て切て今敵考へしとい思ひ考ざる事か
まぬ甲を名て曹と名ば弓の批をも矢を指し算を礼してうらた
珍く処をけり賢いと丹波を名先小突て入進立く美戦小佐に在道
人敵進立る小嶋村と名と進考りあひつ陣進
器さると足甲の如大羽は具是名を際之をけり小を足付たる計
少て陣打振て大重小なり美戦小大進下知して陣中のおまはる敵
と打出さしむとせとて大久保公定水腫惣勝我もくと進考り道松
大々揚と名くつや波の如放と進立り徳川及北本陣一切て入運の備

肩を交せよと下知せり掛川督元とて眞紀叫て攻戦ふまぬに
波の渠に死武者取立りて味方の退軍軍配をひく道松先小
突通て巾陣と目をてをむぬ公の先陣右川伯考を敵正将率
と一面に打交を疾炮を膝車小たて待々けりて次ふと歩けり兵
長刀穂先をたし一魏と考てしして扣り掛川督元小碎目を母波を
大々揚たし疾炮をれをて敵と足程傷を止車やありかれ者たて
下知せり、徳谷七十帯一書不徳と突らりれ、退兵とて叫る敵正命死
振て下知せり八十挺の疾炮一交小放さる思煙立て出ら面電の如く
おれいさ先の者打倒さる波中軍人を急めし日根野派吉大々揚て戦
場へ出る疾炮おれて軍の敵へしや我小後けし陣中しと振迫
突てかれは是小後て伊奈武多橋を先として村を云うて美を中

少も態言七十布大才の徳を振立く向ふ者のでり居んを庇内甲を
胸板を擧言股懐ひかく八面不突かくれい石川の兵村しをりて追
まゝり水車懸念悟後れ此小来夕や吾や連敵と上段下段不突合
しゝあれ徳んの上と下とを相合し終不態言を討ちたり日根野
と大勢を物をもんけ言を並振あかると追立此をり水車を
二尺寸せ左カキて掛合火を散して戦ひみちん不突を突徳を切
り此をり下と上甲の神と三ツ不キりれ目くらめれうつむく
たに御首をり大物追松大を不敵て極の長廿二尺八寸の大長
刀を水車不振をり藪をり幸ひ終りて利を瑞言と此を相田
と布りしと又て長カキり掛をり追松内甲より昭言のめれ眼み
確と眼を居り此男を振立て三三三不此をり五布不誦して七カ

水車不半一八寸を拂ふといで物見をんて追松下と上ををりて胸板
と振けをり突と七カキてお田の長刀の柄を切り左お田右カを振ん
とまゝり不とつと入まをり徳かも傷をり不縄出搦んと
まゝり不一過傳系草結天のめくけ来りりれをお田色くけ者討と
云もあまを追松のこゝみのもま一カキと追松眼を露と居此已れ
推第こつと一カキををりて生捕あ人と川立追んをり
あ人大き揚味方小人いお田をお田をり過傳系生捕をりお合を
助をも呼りり大久保治をりけ言を追ぬをりあか之追敵し人を
而を必や振立りしとをてつと十頂羽言賛をりめく行元と血不敵
少大八寸の大刀を向振をり返せ居ると有りり追松をり返り
新すやちと大カ振をり一カかん不あまをりてと追をり言と居り

除んてし小服板とてはとては之を今昔日け一石刀打小迫松が丸の吹返
と切碎れ頭を横筋遠下切しけられあつて例れより残兵は大将
討れてう落た甲の松井た迫石河伯考も短兵多不操身も小依て残黨
散るあけり城の中さして近入るを後と城と責るとい一五堅くきて弓矢
炮で防る九四言小岩を築て守らせ 祢君は二月中旬見身(西河陸)
此岩遠別乾の城に天押ふ内た為といふ者者武田(心)を寄せて中送しけ
る今徳川家の掛川に城を置り今戦う中(之)武田中人殺一隊は老(之)
其(之)江迫隣悉く甲別(之)味方小(之)信玄(之)信玄(之)秋山(之)伯耆守晴道(之)
命(之)信別(之)小伊多(之)督(之)三千(之)余人(之)と授(之)山路(之)と押(之)て(之)別(之)小(之)入(之)天押(之)の(之)城(之)に(之)
之内(之)た(之)る(之)武田(之)の(之)志(之)ある(之)面(之)に(之)人(之)質(之)と(之)五(之)並(之)て(之)信(之)玄(之)の(之)武(之)田(之)
幕(之)下(之)面(之)を(之)別(之)北(之)山(之)の(之)法(之)士(之)人(之)質(之)と(之)出(之)し(之)て(之)は(之)来(之)る(之)中(之)河(之)

白坂古市(之)命(之)と(之)云(之)来(之)り(之)て(之)熱(之)風(之)と(之)云(之)て(之)快(之)少(之)す(之)次(之)小(之)白(之)坂(之)十(之)在(之)る(之)と(之)云(之)る(之)
来(之)る(之)古(之)市(之)命(之)の(之)次(之)小(之)白(之)坂(之)十(之)在(之)る(之)と(之)云(之)る(之)熱(之)風(之)家(之)に(之)秋(之)山(之)立(之)根(之)
一(之)山(之)未(之)晴(之)道(之)小(之)知(之)ら(之)る(之)と(之)云(之)る(之)十(之)在(之)る(之)由(之)意(之)子(之)て(之)は(之)一(之)も(之)拙(之)る(之)事(之)也(之)
ヶ(之)洞(之)く(之)云(之)晴(之)道(之)終(之)つ(之)始(之)の(之)六(之)小(之)白(之)坂(之)に(之)仍(之)る(之)者(之)に(之)彼(之)ら(之)女(之)配(之)の(之)者(之)は(之)盜(之)を(之)も
仕(之)息(之)ま(之)し(之)我(之)妻(之)の(之)汚(之)へ(之)り(之)と(之)追(之)て(之)す(之)と(之)云(之)る(之)事(之)也(之)面(之)に(之)か(之)り(之)に(之)我(之)妻(之)也(之)
と(之)る(之)十(之)在(之)る(之)秋(之)山(之)へ(之)幸(之)和(之)野(之)を(之)歩(之)ひ(之)し(之)秋(之)山(之)は(之)其(之)負(之)を(之)以(之)て(之)尾(之)能(之)
志(之)て(之)立(之)場(之)の(之)本(之)元(之)と(之)稱(之)す(之)時(之)に(之)か(之)り(之)に(之)涌(之)出(之)十(之)在(之)る(之)と(之)切(之)敷(之)し(之)直(之)不(之)足(之)財(之)
へ(之)馳(之)込(之)公(之)晴(之)道(之)を(之)一(之)こ(之)小(之)白(之)坂(之)海(之)井(之)石(之)川(之)早(之)進(之)據(之)を(之)取(之)り(之)し(之)
本(之)多(之)柳(之)京(之)お(之)怒(之)て(之)秋(之)山(之)を(之)并(之)殺(之)し(之)て(之)中(之) 公(之)哲(之)由(之)上(之)史(之)者(之)今(之)信(之)玄(之)
甲(之)信(之)上(之)別(之)を(之)依(之)る(之)上(之)郭(之)後(之)府(之)を(之)も(之)小(之)入(之)れ(之)に(之)并(之)先(之)南(之)を(之)難(之)し(之)短(之)兵(之)多(之)功(之)を(之)
あ(之)ら(之)ば(之)何(之)を(之)一(之)旦(之)の(之)怒(之)り(之)小(之)大(之)謀(之)と(之)乱(之)る(之)を(之)先(之)秘(之)便(之)の(之)使(之)と(之)以(之)信(之)玄(之)の(之)様(之)子(之)

信玄試みて返さし依りて了る事へして山景半を極村と云ふ
信玄方は別口上小笠原に渡河我々の別々の契約に就く秋山
を別へ踏込後士の人質と云ふ困るめ何の子細をや早く秋山を
取らば一し由返さす依りて了る拵の場之當時吾等の信玄一言も
偽りて何ぞ得る一言と云へしやと申す信玄あ人の役之極
地是しと後咄出秋山某少中宿志を別へ立戦陣仕す
石原五郎之男は時方一呼九と急交拵一信を以て此のあ使物如
山景逢て出當時小笠原徳川家へ何ぞ弱き由返さ成りけ次る
亡し返さし信玄嘲笑ひ小舟かゝる家康の吾等の良將申し容易
亡し難しと上小篠透を信ひ信長又徳川と交陣一戦後輝虎も
入魂奮然兵と集り争ひ笑とあるの及理之時首を待て我はん

山景云後小舟も小笠原を推しんや信玄曰後小舟も此は返さして秋山
と申すは此の事ハ世に幾度あつても使物未だ交へぬは返さしと申
しも是別の上と懐け彼を奪はんとは申りて身て 祢君ハ秋山
川九と信ひあふ小笠原と懐け人質と云ふ令よし望古秋山と
百と云ふ不系めて川合久公孫と云ふ秋山言へば信長も此の我等と
信玄と約束し依りて人質と云ふといふ流石親度忠より二代の身
今川もあふ抱せしれ今更さ知れと奪はん心よる故不遠
別とけ一系不信言一返さしと申す信玄の能下と
成り甲陽の力といふ大才小と成らんと思ふにけ事信玄決心て者
内中宿志へ秋山是と謀り世に信長は此の奴をかくし信玄は毎
町守りて人質と云ふ後小舟の信心有へしと申す公は言はれぬは信長

いふ所の酒井忠次と人質の事へし由也酒井と稱し甲別一功りけるを
中次と稱す酒井と云ふ原川忠房出はし一使ひ給ふへしと信あり秋山元
より公の傍に在りて忠房大に悦ぶ別限を約して川合を返す相立
原川一より先をて極よと伺ふ酒井出向津幕と信秋山を死せし
用意夥しい事も人数少くも上用心をなれし秋山心を安し別限原
西の酒井及不出向信臣因前控者自今由目と云れ以下と云
秋山大へし挨拶を極秋山伏身り三百人へも悉く酒と食應を
秋山と信あり人のめく致し秋山徳をこして酒数飲み及む徒上下
碑石和を酒井と信大を揚すれやとのたけ曲老と生捕れし碑
下より忠房出秋山を捕へて働せし胸脇致しく石川信房と信と
起し死せし碑石行端よりたき信と云と下知して皆生捕酒小

碑石等と搦り其時本多の秋山とせりし酒と云人質と信せ
給ふ命を助けんと云秋山則秘符を以て士卒小告り人質を
更きて秋山を追討依り秋山幸記命を助り漸く伊予へ逃ゆ
秋山より信訪原小古城の邊なるを五五の松井忠次と大木
撰り原を渡りし後も武田方川と信り妻并り大花進忠次能
りて秋山毎小武田勢と討五時熟功小依り後小松平因防り康
親と云市姓名と信り同く防りし字と信り 由也形に致す子用
防り康重の代り
其後再掛川の城を襲せしと云味方小は大に賀柳原多居進
原沼小多原小粉骨を以て今川方小も伊東治部日掃初朝比
奈小年人を初として元年四功の面を死と信りて防戦小よりて
容易易城を以てた度との戦ひは城兵数を以て討死し又ハ

手負し上後諸の味方となく初て城を抱へん事叶ふ事なく
客小田原(一)役とせし掛川の城保ち難く仍て一先城を定む
條家(一)才とせし氏政又その合力とせしと云われ侍と云われ
送し小條一族布従と云ふの評定あり時小條康の四男小條安房守
氏部列と出でし中ハ後を為す此間ハ今川護代の士數多御居を御
小田原今川小志と云ふ有族多か多し終ハ氏部南城へ入りし事
南家(一)後河も属しへた不事と云ふ仍て評定極り氏真事知す小田原
評定有る事又の返さし故ハ五月上旬氏部小倉内務を命とす
よとの供と云ふ一 祢君(一)中送ししハ公ハ直ハ好才なり不不忽の事ハ小
ハ怒難言と云ふ事ハ已難かり仍て公と和睦し掛川の城を退去して
小田原表(一)在城に在ると中云ふ 公早速由派字あり別派ハ今川と云ふ役

して今川家ハ小田原 由由在は北江尾有由指言紙と氏部一はせりふすりて
氏部心を安し五月六日掛橋より取小田原(一)退き給ハ
公ハ別掛川の城と云ふ五族ハ石川日向子家族と入重給ハ松平君様
と云ふ召し流石古(一)別派を此ハ此ハ氏部と云ふ事ハ一と云ふ供よりして
伊豆守戸倉の城と云ふ事ハ初て公ハ既ハ小田原陣拂あり為小田原
一は信田表四郎村上後理と云ふ事ハ残黨と云ふハ掛川の城と取立一揆
の如し矣玉と云ふ事ハ然し之も後を為す掛川と云ふ事ハ入せり
公ハ知由見より先ハ小田原と云ふ事ハ在外此よりして討更由人勢も少
かりし者動將と云ふ 公少も勢ありハ一揆勢何程も何ん石川信
考と云ふ事ハ此ハ此より大勢ありと云ふ事ハ一と云ふ事ハ公ハ此多
柳原多房元忠服部半兵衛後色事ハ大原表逆と云ふ大須賀

の事なる事居て、内庭四年、同日、五月、必命を更、案、田七九、命、
天智二年、唐、青木、又、四、命、中、招、平、左、馬、右、松、平、八、第、三、命、并、津、小、左、史、
之、宅、跡、以、唐、書、之、百、連、之、れ、件、の、城、之、の、り、く、之、由、を、り、あ、れ、の、城、兵、地、掛、
ら、ん、の、以、尾、後、之、格、止、て、云、跡、より、又、命、の、大、幣、丁、を、往、川、及、よ、か、系、
武、志、を、并、て、何、れ、せん、と、又、知、は、り、小、孫、より、来、り、大、幣、の、石、川、之、一、揆、
以、之、格、後、悔、也、公、祖、之、日、也、小、妻、孫、不、に、平、井、志、三、命、小、林、平、左、史、
大、久、保、志、三、命、等、十、六、人、討、死、し、れ、大、柳、原、小、平、左、史、康、政、を、場、を、去、り、
去、り、て、法、誓、之、三、誓、め、終、不、城、を、棄、落、を、一、揆、き、人、も、跡、は、り、討、殺、を、
扱、又、今、川、家、此、之、浦、右、之、小、原、を、殺、て、所、を、り、り、り、氏、志、没、落、
之、事、で、軍、勢、悉、く、落、し、た、地、也、を、復、へ、る、心、地、に、て、是、不、信、也、
迹、出、之、天、祚、の、小、立、原、を、公、命、を、殺、ま、ん、と、被、不、不、死、り、と、命、

つて、今、川、の、仇、の、渠、一、人、不、有、并、殺、せ、と、部、め、く、在、這、て、迹、て、及、也、
之、を、吟、ふ、小、立、原、を、い、何、れ、丁、を、三、浦、上、と、て、并、た、り、り、こ、し、て、は、り、
其、を、追、殺、す、降、り、肌、て、百、姓、の、門、小、立、原、を、乞、ふ、百、姓、を、以、て、
己、の、大、考、甲、一、課、取、之、を、け、り、一、家、親、殺、す、兒、孫、後、を、せ、り、悪、人、
有、り、や、之、追、殺、以、危、角、を、て、富、子、を、根、方、小、の、之、れ、死、し、と、り、
尸、之、を、納、り、考、も、あ、く、甚、焉、此、何、命、を、成、て、汚、名、を、子、年、小、
跡、也、り、

之、即、今、川、家、小、孫、不、而、之、悉、ら、折、れ、矣、種、も、こ、を、て、神、君、不、
從、ひ、也、事、を、終、不、を、別、一、系、小、由、自、不、入、之、時、不、永、祿、十、二、年、一、
日、十、三、年、改、元、を、り、元、龜、元、庚、午、年、
朝廷に正親町院御宇
武家には將軍義昭御二月、
神、君、左京
大史法、光、臣、を、百、七、位、有、り、今、既、不、を、別、平均、せ、り、云、

甲別の武田より頼みたる所を其に似たり我今却て此を別ハ別
後河平藤原の信玄の替り係り責入り成てい多日此軍即ち後
次一仍てを別小立頼と撰て城を築き南是時表小ハ之命を
主我ハを別小立頼と仁と以四民を懐け武と以別教を防く用意
甚と欲する之を先機墨令の事して防戦中し時ハ難し我等
家不叙頼の道不達しとる者や有ぬ是を以味して中守せよと信
ありし時柳原小左左康政又平昌七郎席と逢て中より信要神
小左長はま小三別牛宿の伯人山本助助純當時甲別不在
家中是して助助を以摩利支天の再使として召致すと承り彼等
助り下城脈の中ハ山本新九郎と中老との渠ハ小玉長尾家の軍
勢守佐更後河平宿守小兵法と学び教年長を如村上岡階也

漢法の子御由て備位信玄弓矢不及の友兄中教味方と別ハ人
と頼ひ尚家の義と承りしと某と於一兩年在是し此老小會と
られ居り中老と中上と

此新九郎母ハ本妻の姫源く懐胎の時其家を照拂ふ在浪と
して其氏の事を成り此新九郎と名を後死す時懐胎の子甲子
ありしと云ふ事ハ山本の家室傳前在成此種刀を授けしを授
く其助源は此時後河平の時其子御と信り助助家室と云ふ疑
ありして見付一雨小者無法と學ぶ後其母ハ武田小位(新九郎
ハ兵法いまま金明の法とて越後(以て守佐更小學ふ去弘治二
年丙辰六月十二日三別へ入り親吉是を介抱す
公別是と云ふ事ハ其子御傳者不傳不見の腹力なり無法と稱す

事孫吾、肺肝より出るる如く、此の方、後を治むは、油尾より、幸別、見守
此其、不、却、城、之、第、一、也、中、之、令、を、し、此、別、中、多、保、在、尉、重、次、之、其
奉、以、不、定、め、治、ふ、山、中、表、へ、合、を、更、使、知、不、得、し、見、守、し、立、守、り、て、中、に、
見、守、此、表、へ、其、要、害、宜、く、以、教、之、防、へ、ま、地、不、能、以、表、地、於、川、の、城、に、
宿、免、其、不、少、て、以、大、廊、此、禮、法、不、足、を、以、所、不、新、一、城、之、築、く、向、は
第、一、申、而、第、二、申、中、之、宿、免、表、へ、以、中、不、依、て、是、性、而、一、城、之、築、
依、在、一、部、禮、法、是、之、依、在、中、隔、
以、時、大、公、保、屏、ヶ、四、ヶ、用、意、也、 引、目、の、城、唱、惡、表、へ、て、溪、松、の、城、之、名、付、也、
以、由、城、成、務、不、依、て、是、務、の、涉、城、は、三、希、君、之、臣、重、此、公、別、溪、松
へ、移、り、せ、り、三、別、吾、國、の、城、之、酒、井、在、為、尉、忠、次、不、能、り、り、三、河、表、の、族、既
之、定、ま、り、然、不、以、三、京、と、第、一、長、忠、使、表、之、中、上、右、一、町、の、今、川、の、田、原、小、京
肥、前、多、稜、實、其、之、表、へ、言、天、神、へ、在、城、の、在、由、怨、有、小、京、の、首、五、て

を、上、位、の、位、を、以、小、京、は、言、天、神、へ、引、田、交、り、向、水、は、以、昔、由、田、向、て、
三、京、人、を、一、令、之、以、脚、を、と、云、ル、不、小、三、京、と、て、痛、交、中、在、あり、何、
卒、即、ち、第、一、也、之、依、り、治、め、り、之、以、之、報、し、也、
神、君、之、も、以、由、根、子、宜、く、以、さ、り、し、以、長、忠、旧、情、を、持、て、以、以、振、也、
阿、ら、き、向、く、宿、免、多、稜、不、入、を、以、振、除、是、を、不、殺、と、云、長、忠、故、不、計、ら、此
必、不、義、を、御、へ、き、男、之、と、信、者、り、と、り、也、
三、京、不、以、以、別、之、は、依、本、一、統、と、て、收、江、南、は、依、本、系、禎、親、之、
城、不、有、江、水、の、京、極、是、之、收、と、以、天、濱、井、あり、溪、井、不、得、と、久、政、
之、子、保、前、多、稜、故、是、之、藏、田、信、長、上、洛、之、御、溪、井、と、洛、次、の、案、因、不
之、被、さ、せ、ん、思、ひ、計、策、を、上、り、と、れ、由、妹、お、市、度、と、中、之、娘、不、不、成
長、政、事、不、以、也、と、り、
長、政、へ、縁、組、の、事、ハ、事、表、三、卷、目、
又、之、方、多、稜、三、京、不、得、也、

長政滅亡の後お市及宗田不降り又宗田生害の時曰自害せしむる三姫
あり是人の淀阪幸人の京極高次の室幸人の台徳院生害の事有朝院梅子と云
ヶ極小化事有兒極子して睦友有りたり或時信長曰より福高平
左馬之使として密に 祇君(中)と云者有る中より事あり 故市人拂して
市對面は成りぬ 福高中上は小治に淡井義の身近に親類の候小市
直に信長不為 必定仇と云人へ言者不尼極め以故只今の内切候し
山守と云る(左)と云助助の候市折り市有左極心候は成りぬ 市
以上へ公心候ゆ中して福高と云返り者引後酒井左為忠次本多而助
あんと云使不為 信有淡井の仕方不目立中へ公の成言を故人恨に
下り候し市上使して市諫云不及をせしむ 依に信長はも 細候あり
者此沙汰候と云る 然る 元龜元年庚午正月初旬越前守

朝倉左馬督義宗より一族の中督右主定宗と淡井方へ是を
て中より下り候市の父危不致て朝倉是を救ひしるは定て矢意
と有へりは市時既小朝倉の家あり限り淡井の家絶ざる内は
お市にこそ和親を背り候とて極め其社記院文を以中より
たのふ定て矢意は者名候ゆ一候小多年尚家と仇有織田
信長と縁也と云信は骨肉の交を被さるるを一應尚家(存)も
向く信長を矢するの条を云意を候ざる如く美京不肖(存)も
まも父親の業を継ぎあり市返すの事不よりして形て思ひ知るを
へしと云る淡井をて信長との縁組ハ止事と候ざる不あり
且朝倉家不為して教せしと信長中不依ては信長も交へ今
又何も勇士の一言を忘れ人や織田と合戦ある不致てハ其

切波はきかりと云なり

亦一説に淡井父子信長父子へ及びて立て保年越前へも信
信長として更ふそ交と不改依て信長武時淡井父子を招き
今我脱小大玉の成を頼家の朝会志す小此を然る初の一言不
仍て朝会へもと出するなり及去我不育人との九高時前昭
郷への後見之終不此に大名皆使志を死て將軍共機嫌を伺ふ
朝会既小細代の樂と思免と意なりあう將軍亦幽路へ由收を
不中上と礼志交而へ今世上急く礼て武と以治へ時之故不朝
會と征伐せんと思一高由初の為謀と思ひて書と延引せり
亦也何卒朝會を初めて將軍へ使志を登せ信長へ降参
と申りぬよと信長されぬ淡井父子油波して別江別依

和山の城に破陣丹波守秀昌を以存の額一と小越前へ是見ふ
及小義宗を以て別破陣不向ひ申りぬ信長既不虎狼の
心と合ふ天下を奪はんを然高時將軍と云む極子虎狼の
威を借らぬ故不我志を征せんと思出幸油波申す丁そ重不
るれぬ別江別江と云ぬハ此事を以て密不淡井父子へ申しけ處
我亦信て家長朝會申替大吏定宗を以信長へ降参せしめ其
誠と云ふるなりハ信長必出張せんを時味方弱くと何しひて
信長と切不修川入へて之を時秋政長政のあ人あての約を違ふ
近江小旗之上を後と云切糧乃を塞ぐるへし然る信長
因章て川入へて如と兼て指りくふ下知を付へ要害を設けて
障とめ一揆時依を強備し八方より五圍まハ不氣常内

南無おれは信長を討たんと必定之又南無之進了も進兵
かゝるに討たれは父子の面を粉骨をまかすに代り入れては
たの回を承へたありは信長を討たは一番の事なり我の上
討てたより武威を逞しめて四兵八蛮を誅むべしと云はる
は事の評定
ありし時より社政は今の家系に頼りし中御も少く無信長の人
察し又も喜喜深き大御なれば今期余も信長の命不随は必
然前も責討へし時定て南無順政なりと我も父子先陣其
之信長中へし内へして大恩ある期余も昔より先陣も成へし
以て信長必南無も責討へし先陣の時一人を制するも理者
今期余も謀不随て信長を重地不入れ進兵包んで討たんと
欲しなり

面々何と夜中を吃交眠と云はる子息備前守と初より進兵する面々
兎角と云ふなり是時社政大奮揚面々何心持たりや信長の
先年長政と縁なき故時天下平均不及其誠意もあらず
為事を勤め我も一言の期余を責んとすの枕詞何れも表裏の振
りて形甲斐なれば男成り備前守といふこと事なる備前守の
心中には信長は
小多く責むる虎狼の勢を欺りたり此れは我々京中へし
南無無れ滅亡疑ありと思ひしは流石男は具は負はる父の
思ひれんも如何と
思ふつむしり此後より不強壯生せし六月あつた大の男
少くは長政君の兎角は意を起しは道理極きり男は親に
てはれしと思ふなり併我退き考ふ不信長は只今も
後丹波又畿内へし入るべし判別する往來を

亦子小付しれりて誠意不申因心の連も尚家と誠意の誓りて
信長はと戦はんも好もよるはれ誠意の思儀これと思ふは信長は
へ申因意の誓りて人故一子に誠意へ申かたき上あ家二事の
申取扱ひて終い申と悔り申なく申下申事大不怒り汝某家の傳
りて推事あり一言か何れ尚家不人の名を知り人いれ此やと
産養と誓立り奥不入り長政深く父の恩と欲記赤尾貞佐も
を招き心成を言告り此の受領も所伏して何卒某謀を加入
せりへりて下申事言へり我々極く評定不及知免角信長はへり
此の信長を言れ別念家へは破胆丹波を言ふ家成も此孫云云
かへられあ家の言事ある事と申すは此の社に此の事と申すは下申事
一向同心なく淡井不尼も本村日向もあ人を信長へ申すはへり

先付我等の痛き事不申事女は不申事此の心なくは是れ不及り
故不下申事皺服と切入り言事首立て信長の言をへて居る事
此も下申事子一父子此の言を言ふは心定て誠意朝倉人味言事へり
此も不候候あれは信長も横身と下りて并天運の終りむらゝ人か
及不不申事是尚家滅亡言事へり時節あ是れ此も不及り別此
彼不向て父上の信委細畏り言事へり上六朝倉不味して織田不為し
信長と申すはへり名去朝倉の御甲装くくく入此の心元を言ひ
終りは信長へりて返りて申用事不及りれり是を朝倉淡
井滅亡言事へり前表へり此時小信長はより 祢君へ此言事の
り上申中言事下りてもしり

へおしり四月十日不 和君も若狭路不掛せ後ひ能川陣し
時ふ亦有し敷賀才信長公不掲 後ふ計信七位より八位不
頼宗のふえり百山嶽少は胡倉の一族多勢ありて後ふ也大
ふは徳川家不仕とてさうとて是の内人数少く也(ハ加勢の爲不掲
す我木の軍物果回修理猪家木下友重希秀吉池田信希
信輝と中何ん位て別と果回木下池田三將を唯出され徳川及は
南時海及は弟一北万五之海事け交は徳川及の備とより多いて後
事不仕れ之様扱好して蓋出で 公亦亦陳不備を後ふ不明在
四月廿六日未横雨云北引籠れる事申より徳川家先陳酒井
及の耐忠次がくさこの旗共先不進めて関の土声と上や吾や
者亦これ備を仍て楯の羽を乱さる揮て是怪といあるより兵

之進めて唯一時小岳破るべし攻めれば城元東海より嚴石
崎より申あけ本腸の細なるを踏く小付柵をあり逆母本
城川掛あて小堀切して馬北足かかすを設けつて白雪と等しく
累の上小一城を搦へ朝倉玄蕃九郎康徳三子余人揃居るに
向侍韓信法著武侯の攻より一時小岳へ入りては是よりり
左馬殿右次院瑞法大音揚て中ハ東玉の戦ハ既小所小子並
見きり北玉の軍ハは交て初之見苦者働下商家共武勇可
底居る誰あるあは柵立て川破れ逆母本と川除すと下知
まの声の下より六人あり大男高黄糸共強兵と大長刀を振
るけ大音揚てあしや水柵破る小何より此者へり石原忠忠と名
之より玄糸池出る小是小後之杖置むると信加後玉子今作橋説

三河後風去記正説大全卷十四

越前守角山城攻

斯て淺井ハ表ハ信長ハ隨ふてり其内ハ朝倉ハ傾きり
於小岳京ハ謀りて朝倉中務大進を或ハ人前して悪口し或ハ陰
あて刺撃して交し面目と矢ハはる小依り中務大進京内ハ京於
へ人ともとを何れ市人教と向れ其市門下旨中務大進信長初
乃後ハ心持も者さうりるが密ふ心ハ越前共柵子と向を又淺井ハ
親者居たる小依り父子と招起けずと江原小同者ハ原を淺井ハ
以上ハ首命をれハ今ハ教へる小何れハ是と攻打へしと人教と
傳りれ福多平左衛門 神君中務大進りる朝倉自分共殿可
諺將軍と將人 ちり依り 信長征伐と承り 教向まの之り去

越前、宛先此要害宜可下し人降し、所易勢を致存すと有
り、故に神君早速由許容方て波阜乃城へ由出有り、信長大悦
言を、其を、由地之あり、別由謀之、信長、浪根へ由信の後
云、遠あふ、由人、教之、催され、由、由、少け、之、信、庸、君、早、若、き、助
親、若、石、川、伯、耆、者、教、正、之、殘、さ、せ、給、ひ、由、人、教、子、年、人、之、以、浪、根、を、由、出、立
及、せ、し、る、信、長、公、ハ、先、登、り、て、三、万、余、人、之、兵、を、以、江、州、へ、出、陣、有、け、時
浪、井、父、子、此、面、より、馳、走、し、て、而、し、る、若、屋、之、掛、路、次、の、掃、除、未、入
結、更、浪、井、父、子、途、中、を、由、向、を、信、長、悦、甚、限、句、其、後、長、政、中、より
由、通、余、人、乃、由、征、伐、を、下、ハ、長、政、一、書、先、進、を、仕、日、以、の、由、恩
之、報、せん、の、之、を、由、由、中、より、朝、念、な、ま、り、て、強、き、を、由、由、中、より、
由、境、を、由、送、り、り、由、信、長、公、と、機、略、能、江、州、を、并、馳、て、越、前、の、由

之助坂初相、如、如、後、日、根、由、山、田、祖、父、友、為、喜、山、年、左、更、進、後、る
乃、の、浪、田、浪、田、水、之、助、多、居、居、居、居、他、多、我、も、く、と、攻、入、て、或、ハ、柵
之、端、倚、又、ハ、逆、母、本、之、振、倚、去、思、小、敵、を、責、せ、る、小、友、此、是、限
如、之、ハ、柵、の、陰、より、矢、玉、を、之、飛、せ、り、防、之、に、力、勇、を、示、し、を、相、去、其、以
安、也、声、を、揚、て、突、通、れ、左、右、射、太、次、大、喜、揚、て、先、進、の、味、方、を、并
せ、り、各、陣、突、つ、面、に、馳、よ、り、人、し、と、又、由、揮、て、下、急、あ、れ、水、形、熱、を、揚
忠、重、松、平、之、殿、女、家、忠、松、平、新、助、忠、流、内、後、を、其、之、由、家、曾、甲、の、後
之、傾、け、名、の、声、を、上、是、聲、を、立、て、之、三、三、之、小、攻、せ、る、小、務、て、忠、次、の
一、手、三、千、余、人、喚、び、叫、て、若、石、を、併、ひ、堀、切、を、誦、り、馳、へ、し、り、難、不、と
并、馳、て、浪、井、堀、下、を、し、り、其、時、既、不、懈、手、へ、も、柴、田、本、下
浪、田、從、軍、七、千、余、人、攻、勢、を、固、の、声、を、揚、て、山、を、不、疑、し、て、夥、衆

あつて云々句一城を朝倉玄蕃允三郎速成は其城を以てよりと
徳大將坊子兵庫信堅を招て敵軍前後より責め、此り
大守小幡おして搦手の大幡へ市辺ハ大守を防るへし我
搦手とちり入官要要害とをわけて戦ふなと云控へ搦手
へ飛向ふ玄蕃味方此軍勢弱兵とを先自乃大將酒井忠次
采配之拵拵く士卒を奮起て是武の小城何程の中者合を
馬系拵て拵ふし此あは城を以て引破れ牙を搦へ下知る小
中より雷丸の勢あり徳川勢は有り 賢しと我系入人を甲此後を
傾け隠れ袖と組合を急心や事を拵て拵ふ拵を系敵入人
る小城中矢候者さりとて軍配村多を拵へ箇先と多へて近月
共とをらりしと拵倒し石瓦を以て箇のめく小幡拵しけむは

考ふ多々拵れ或は子負又ハ矢屋小拵拵るハ流石といさむ
徳川勢を以て是より人々拵ふる色ありと増子兵庫は其城を
沈み入て是櫓より飛つたりと徳川勢も是へ下つ城門を以て開け
寔是れ弱馬の心持と云て一交小突出たり味方の軍勢も志は
ろおぬて拵手の如のま中へは是れもなく系此、韋能系を以て
拵て切て此れは難事と云へ徳川勢を以て是より攻めを
退令は是れは酒井九次大者拵き、か若大け此を退て誰か
面を向へんと欲するや敵ハ小幡を退る包て討て此れは是れをぬ
さげ付入せよ拵れ、血眼小拵て下知るれ、詞の下より松平
与一忠政松平三右衛門親俊松平又八右衛門伊忠松平玄蕃允清
宗松平又七右衛門家忠松平源七右衛門康忠松平源九右衛門系忠松平

八節之節康定中多老後多度孝牧世新治節康放役亦甚
三節之節康定中多老後多度孝牧世新治節康放役亦甚
其る極率此面をぬれハ此物くと引提能其力と心たき
立く聲や声を出し其思ふ如て突て加れハ城兵隊捲り立
られ門より出入る人より如く増子兵隊大着揚きたる如く
此振兵隊敵ハ既ハ小勢加を逆めや面を返せよ人々之敵不
知して其方と方と通て去卒と退立攻敵ハ不城申其兵隊免て
用意ハ大木大石と投るに是方と突出命令と限りハ物不流石
の寄手自負死人不辨易して小口と少退て人馬不息とつがき
之云も阿も此と留れ其あかぬて退立する忠次怒て云甲斐守地
人ハ此働ハ大次子所不担たき引返せと立並せと敵不あせりて下知

是れも耳も更不少の礼立て退けハ大勢ハ引立られ心加
忠次と終ハ不城捲り居されハ方不敵礼を増子兵庫ハ此りや
あふと士卒と下知して探立く責付ハ不勢ハ不城兵隊逆め
場とも少ハ不城捲り居されハ方不敵礼を増子兵庫ハ此りや
先達てた方ハ尾流と使ハ人敵と伏せし後ハ後ひりるよ此
体ハ見られよ時ハ不敵ハ不城捲り居されハ方不敵礼を増子兵
奥平貞他も貞能大に賀女在為康言柳京小平を康政酒井を常
子忠舎舟を七節忠利於本越之節重時清田平藤大久保七也為忠世
同治多ハ忠休本多平八節忠信葵井清藤を鼠不翻翻と吹簾名聞
と信多ハ吾も一文字不探兵一切て是り後兵と名不探其れハ増子兵
隊見と見ても其之字敬の計略不余方と引返せと面と大と不

人数と引上ると海井忠以攻下りやあふと大波又引上りて返りぬ
く人数と引上ると海井忠以攻下りやあふと大波又引上りて返りぬ
けれり小浪浪りぬ返りて攻下りぬ
内屋之虎の目下より大久保之虎の如くあつた天竺妻を於て
惣虎の如くあつた初として空を飛ぶ極士を初として堀を
宗上流の城兵大に警起して防備の懈を失ふ所を攻下りやあ
家もくしとあつて攻下りぬ城門を打碎けぬ由人数はこほり
櫓多つた火をくめて櫓の下を切て上れぬ櫓多つた向ひに
池田の云物見しと見て徳川將士の太子を破りぬ是の時を失
けても捕立て下知されぬ後陣の兵碎易して胡合言あつた軍兵
は必とあつて四角八面に散れぬ是れが京健柳子此忠をかくて

下知されぬ是と再りぬ少くもあつた大に怒り物に味方振
りて最後は働して目下物見しと云よりも二日徳を引提虎の
源心とあつた風情して返りぬ三百余人を奥鱗小連ぬ雷北
流の如くめくあつた声小突て掛れぬ勝家は是と見ぬは城
口之をそ腹を破れぬ返り包きて討たぬ影に下急と付た事
元也は彼下り不家に喚り叫て責戦ふは時務家が促し溝に半
在る時半に是言健時小十六歳赤糸の具足小日毛の又甲浪の
鬼は首を打てて連能敵多と十文字の徳を以て後合火散りて責
戦ふ京健怒りて推第一小牌めといふつて突徳をばらりと打落し
一徳突小馬の平首辱風めく傷ると海江は攻下りて飛り
京健怒りて己小組をさへくいと立上りつるは海江は物をも

其後上常と久保の在の子あり徳角とつくと又尺一寸の大北野

城目より言く長上て成こと振兵一人研小石丈三丈許うち

久保大不投ふれ二言もかく死するりりり半九後志保が嶽小打て言名者
毎田槍居る名号後毎田大隔二方

字石東城城主故有て後後世大京大支幸長家臣あり由緒あり言世孝信百華王院後秋貞徳
ふ加賀利常少一石不交金百拾苑年念力寛永十年八月三日病死子孫紀伊又中多を後言方子

大將既小討れりれ大子搦ふれ城兵散れ不敵て退く知と二言不承てめ

彼不承て退討首と取り子三百七拾索級むは徳川將
大子討つたとあり神君

則討ふ終不知と信長へ送せしる信長大不悦者方て森三郎

尉可成と心 神君へ申すしめ小徳川家の内武勇也一不場り耳目を

警うしは是より令る海へ人数を向んと欲しへて徳川及れ先陣を

少ひ神意の轉更令る海北城に別倉申替ち申定京ハ勇てより

我ホ一内此れ老あていひしる今小沙汰を疑ふくたを丁そいし人数を

をあられ別を種子と伺ひめひて後事不知有て存てへ一と位あられい

神君是より人数を揮き後い令と崎城元徳ゆふけ時令と海の城に

期倉定系信徳其人の心 神君此海軍中討つ其後勇て信長公此

徳と云ふい先事て海軍下不随ひ尚ふれ海軍内て仕ぬ家京早時を

將兵出陣へか替と神て期倉源三郎京恒と云居加は某候と出向

事あり難くはし向る暇ありも人数ををめられ尚嫌と一責攻やせられ下

以時小京恒は極て血死せ老ふは以て必打出令て時某侯不城申不新

互京恒と某侯より元包とて討亡一北の死へ申案内仕し令と急攻ふ

中より 神君是を言石川酒井忠次と心た言信長公へ話を者某

期倉の人質木ハ先事て京恒とて波身をも指出し以て伺ひ信長是

を言石川外収者者定京既不降余を言り此戦前と平け令る事

指あり先陣ハ深谷せん邊之二陣ハ木下若吉秀吉ノ中合へしと
返り方其時大次ハ依り方在馬ノ小島面して空系人質の後ハ直
波阜あり市沙法極むゆいとも有り不信堂より其後ハ同者といふ
子之伺りぬ上道に浅井父子は五捕ありしに疑ふ知はしつゆり
もあけし中ハ依り大次と肩とひきあひりし席と立け時信長曰
丹羽在馬ハ明智十番と先立て美穂玉へせし武友上野存人質と
交えへた方せしなりと徳川家ハ中をとり忠次けり方といふ事
神君少右衛門井ノ原勝直在れ我ハ信長初浅井父子と縁切りし地
被取信長ハ約して朝倉征伐ありし中と然し信長是と交合ありし
交兵と向けりし浅井何れけり事と後後然し不定系ハ深谷と浅
井ハ五捕事と心謀りて丹羽明智とて美別へ頼りぬ創定系ハ

深谷ハ心を教ぬ小疑ふてハ浅井朝倉と合伴しけり謀と以て
娘と有然し小前ハ定系謀り味方とす此ハ引入後ハ浅井親
味方ハ人数と其切糧及を以て進み討たんと計りぬんぬ其時ハ急
要ありんぬ事り難し早進城攻めつるハ難儀とす不意生せん志ハ
子と見合せし事ハ信長を頼むる事ハ人数と十町計理返して陣と
せし事ハ
然し小前ハ夜築田出羽中系將監ハ早亮御分來
して浅井長政約し難し朝倉ハ心を合ひ申を告ぐるに信長公
大ハ疑りぬ其れハ苦あり面し何思慮せるやと尋ねるに時信長將
然然とて是も老成ハしうむくの信長信長めけり事と信長と
と人々を定むるハ日以ハ鬼神とも物ともせざる面し今臆して見
ゆらぬぬ事ハ其器と以ししと再三信出さるんぬも誰一人も是入る

考となく静り返して云ふ中上も時信長に後れとせむる事偏
信長々運此と云ふは是れ不及見れけり生害の外者へうと
者時原の供お依り本下後者而秀吉の事あるは信長機嫌
あつた下今生れ對面叶ふ事致うと思ふ知汝も對面後愛と秀吉
尋ふは勿神お此後何事のゆゑ中上は信長公の御しと御あり
秀吉も時原中上は命と命あつて敵とせむるは計り難はは
百と云ふは陰謀者にあへて同中上より信長公の御しと云ふは
我も是長不出逃して敵中上圍まらるのこゝろ難事と云ふは
是は名もお此考もふそつ汚名を後世に傳へし計り難はは
しと信あり秀吉押返して中上は後退極付ぬるも君何れ子令
此考も心静り返して計りぬらんや小身小は其は後端止り

た之期余の兵掛りし中上を援て防中へしと内君おは一刻も早く
岐阜の方へ逃れ去りて身を存せし欲兵災安事因念て所より押身來
るは其の暇の思ふ内中一人も返りぬらんあはれ疾く中上計揚
させぬふしと流石小死地小生あつたがしも名を言え腫たなりは
信長公の赤い色お後して終らぬ汝が命と命と吾人や申惜し
勇を此汝と敵へしお此を言ふは小随ひ返し汝も何卒切替て
跡より逃れしと疾く申さるは案田河川丹羽沈田お此大牙の面
く思ふ秀吉お此忠を感して計時の機刺しと人を救て残しと
るは秀吉の人數三千余人不及りぬ形て中上の陣小立切りぬ後
邪君に計り友をへた事を言ひ終ひぬれを河井忠次を言はれお
百と云ふは神幕と出て遠く信長中陣の方を伺ひぬらん小舟火

つらねりてきりくた又へさうりぬ別中陣へ入せぬ信長
の本陣毎火照くは驚くはた重友と生くは定て朝倉五
浪井父子一味しるの告をすむる故へし密ふ人と死て信長の陣
中の様子を知せよと人信し依て浪井別戸田一面を以て信長の本
陣を知りし一面地防へ信長の本陣は毎之焼けて人盡るは
とも柴田浪川おね津田の陣も只毎のこゝろして人連ハ言へ意ある
子甲也やまを馬具雜具の面を道不折くは中より出の端もはつら
本下直名の子余人計すむかひと大息後へ中りぬは 祿君意甲
すなれたす我量保可とは出さる勢や終ハ陣防はぬれぬ疾
人数をうよと市役の対浪井大次或ハ中多柳原大久保内原ハ
の面へ一回ふりりるハ信長は既ハ城を割し籠りては苗裔此

か勢となり君臣をささむひて中加勢あるはわは自ら同山城
とと苗家の武切を以て攻めを切不し終らハ信長意
あふハ何そ苗家へ密内ハは及ぶるは是れ殺戮を以て之の何そ
け時不首を延て死すむく事のゆさや朝倉と和睦を信長に
信長を思ひおそむく血眼不ぬて評定をけ時本下秀吉ハ本
陣へ立寄り増補せぬ六家改極尾茂助吉晴 有人を招てりりけ
相上方隆助不依へ信長版不岐身を招て馬を介れり先陣の
浪川家け事の中存なく決て扱へるは仁をより織田家の恩顧力
家臣不也を只義不依へ苗家の力を助けりり之終る信長意重
不依て浪川家へ密内わく人数と川揚めの上ハは人必死の心を生し朝
倉と和睦して信長を返討んと計する有るは後時に味方何ぞ

故人を防くへ此は腹心の憂へ此は徳川家へ立廻りてケルコト
しと云ひ上と云合められぬ西人由本陣へ入りし小 神君別由前へ
出でてこそ子細と尋ねよ小由人一同中より今交際小上方表漢井
秋政父子期合小語られ跡小記て糧道と改切不備て是を制せん為
信長神速と傳へて只今追口一馬と向られ之仍て秀吉後殿の後依
更別時不拍子並りて是より公北西東と心元かくは存某小中付の
秀吉後殿仕り返掛る期合無と一防止中へし 公ハマしくは急山へ
口申さるれり

一説小此時秀吉も 信長退却多ふと知れは居りし小俄小人言路
友也人と死て了るゆふ本陣小人かし秀吉尋ね家ホとさ(控報)
然る徳川家の高以る故へし悟り信長の退却の事云わたり

匹夫よりぬれぬと云えしれり言母と云へ此も此を只今徳川家懐
の余期合と一味あふ信長此難儀目業を人ためけ云返する言ひ
神君是と坐石屋内して木下志小家通不定て信長上方此憂
小尋て秀吉も控をばしん小渠脱小言小非を隠し我ホ小尋て
弓矢此礼儀小及へる子孫名小信長匹夫より云えしれり此者
勇士之我何そ是とゆけざる言と別時別時と申前へて由返そ
有りら上言多之憂小あり信長子連由人数と引合せ給ふ由信
忠度後殿の命と更く夕後志難言の退口とある言我ホ助勢中
屋へ先き陣と引拂われ後の礼をかく返さへし後陣の家康の
者の上心えおぼる者ありられ小只今小塞りて一撥有と返拂て
引上られしといて大根なる由返そありし言小秀吉言も言小早の言あり

委細に承知仕ぬるに後井胡愈の備し小依て可く方て小一擧を
起ると形も若し時小に之を徳川家小の意此由過ち以て其日人の
眼力小遠い思少くは後陣の意も亦も秀吉の勅中より徳川公は
多くは前陣小をまじひに苦言あふる及一擧を退て前陣を
内定せりといふ事ありぬ 神君もて此許容なくお互小信置し辞争
有し因小早ける胡愈の言へし知れりらん令て後へ胡愈中移井お
事は後京下知して奥行を著終り寺典昭胡愈と部お人数を押
出させて前と暮いせり清井の退るの多勢ハ等しく少く小元也て
前途の危り後陣よりハ関の声を揚て責掛る小依て今ハあ將
論小及お兵小難引小退へしと引別西人数を律めて引揚給ふ
け時中人數三千余人と二小分られ一隊ハ清井九次一陣ハ三つと

神君揮きお給ふ胡愈は京ハ並て謀をかりて信長を偽引込清井
の山谷より兵を發せり相手を少く等取別を北の原の砦城と
折直ハ從軍隊小部百余人面を小珍物と引提花馬小鞭を加へて
信長を討て死んで其の首をこまの口民ハ下知とて其人の物貝をか
むと前陣此切小逆母本江江札札を討てお掛る後在徳川本下
乃お將ハ太公宿葛の肺肝より誦出せる 孫田畧小權杖関張小
勇次と免傷(前代末首者) 神武英雄是とお告し給ひぬ
本下後陣小方て胡愈の退る此人數を操破るぬハ 神君
ハ前陣小をこく口民の設くる逆母本を除柵を破て一擧の奴京
と遊立り秀吉戦法も時 神君代りて後陣を陥地秀吉
前陣小をんて其の首をこく其の首をこく 歌兵海陸小充滿く二小

唐の波可素を討つたが、依て味方共勇卒を欲し、
差控境小引退か、り、如く後陣より、因に勢烈、交空へ
後、莫く、勢を以て、三社と書く、百族一流、むる、久る、見へり、
細、金、象、牙、の、徒、將、務、司、兵、庫、送、兵、之、子、余、務、志、い、思、ふ、
を、こ、り、大、き、揚、て、下、知、り、る、ハ、弟、之、義、策、智、計、を、以、敵、兵、を、
交へ、傍、り、引、入、る、甲、此、も、如、く、圍、こ、り、退、く、一、先、ハ、信、長、を、小、防、し、
根、を、破、る、ん、が、不、必、十、死、一、生、の、合、戦、せ、ん、時、ハ、敵、ハ、大、勢、味、方、ハ、
小、勢、也、中、ハ、以、つ、て、へ、り、け、し、是、を、振、る、を、打、た、る、面、と、
合、兵、と、是、く、螺、を、吹、立、振、廻、と、言、せ、る、為、に、如、く、破、つ、
先、と、組、合、を、突、や、声、を、か、つ、て、突、掛、き、け、螺、を、吹、立、振、廻、を、
又、之、莫、何、典、昭、前、場、新、九、布、思、坂、中、也、言、此、口、所、か、り、の、谷

百才起きて矢炮を飛せ遊言をば、
世も山も元由して、
上り、ハ、敬、兵、慕、ふ、事、列、心、を、務、も、大、勢、を、
け、如、主、地、ハ、公、と、討、を、
あ、は、度、し、一、方、并、破、て、
必、子、百、元、事、必、某、討、死、
中、上、の、ハ、公、竹、石、橋、尾、
上、威、を、る、ハ、事、あ、り、
柳、原、と、百、出、さ、れ、
莫、難、柳、の、
運、母、木、と、引、除、
何、種、も、
何、種、も、
何、種、も、

炮を振舞ひて打さくめ難くは下を打破り世伏をたらし掛るに康政
下知して追之れ此世伏軍此長しと村く追之れ思返傷中を是と
入て七百余人白地小見九此旗揮之れ此旗振りて只今此旗此世伏小
あふは胡愈難そ世伏より多しと河の下より旗炮つと掛ると合果小
柳系と追元是く康政獅子此思をたし八百小南の思返旗の雲
と巻虎此嘯く風情を柳系も思返もたし旗の底大羽ををわら
さる良字ハ死傷のくと旗合よりされ大羽を柳系も指を
さるく小切さるれ旗小危足たる如か多世後中廣孝松平藤四郎
信也右より三百人強此世伏松平と一忠政酒井虎馬たより五百人少て
思返を蹴立て責掛る思返も是の兵象月のめく小切さる如前場
勢九郎一人少て助走り河川橋の旗合より一文字小を入是と是く

奥伝典膳子五百人少て回横旗を突入る在市人救出と河を前太以聖
むたの康も是と是て馬を走せて池出れを水時熱意倍大重松平
直後今家忠大久保大隣小一智小をんてかる酒井系尻振て人数
を多し河の声天地を動し旗の自東南をむく 神君本多美れ
と者忠勝^{二十}一文字小強まり中太小敵兵を穴上尻居り打出ると
朝倉督色めくと酒井大久保柳系も才を旗破れくと旗かる林陽
目水一子五百少し河本陣へ困るより切しかると旗破れ此河人救三
百少して本下と氣をひ川原をむと五とらと加る由多是く由近智
合を旗て戦より大久保新八郎康忠小栗左衛門忠次^{十六}登見
新常^{十五}大久保系と忠豊口と一忠忠益後新八郎右馬^{十六}芝山長
十郎小川系と系大久保権十郎後田中系と系本多之原水野左衛門

敵の金限りて七将八衛して麦野大野敵に難きところ
祐君由渡炮少く迎敵兵と七人を打たぬ内人部居人今も
已小危き如くは後陣より本下屋若部軍の先陣に説け引はれ
時不中多き後、務の事を右佐佐木退散を以て勢小引上ぬ敵兵
之不暮在在人数を多し丹羽長秀の先秀の善後道と仰上て
敵兵より危しれ危しれ如くは祐君秀吉より馬より持度中敵
小安立退散し是より四将一ツ不朽本下して中引退く今は取本杯
と云ふ少くは渡井の兵隊炮と打掛れども物も引揚ふは別守室
善後く四將由陣へ祐君はより是後へ由陣は存り 以時信長
ハハ誠意と引拂掛不掛て引上ぬ小種かく迎に攻不掛掛り今
森三左衛門城井右進と人と云く佐々木よりハ渡井院不胡舎不味して

我由路と遠く、免と計るをれはを設望困成へし油商人切て
渡井の力新物とせしと人佐長りと別守室と 揮身と進して
佐長口へ中より多しは是より前段ハ渡井の人部 稲麻竹其母の如
後方梅の如くも上一揆八方不充満して敵子百とて敵と知れ
まゝ上安室不の措く足並へ柵逆母本を掛つて石突矢を渡炮と云
為り付たれハ天を叫びて翅地と漂る淋と施さん知れハ中へ道まを
不不付と中 佐長たぬ息つて 我智謀計短して敵を不臨空く
け去る鬼と敵へ時名を事と云かうは是偏不渡井の人部不肖く不
より知ら我必死と先 眼を塞ぐはして渡井の為不仇と説ゆへ
怒かたも今ハ前路に敵者を退より大敵せまり本下も取子討
死に及つて人我切後ハ方へくハ邪學控兵一揆不不不恥辱

と云ふよりこの邊の上等切で控へたまへ大お便下而して一云もいふ若
く互に託して教へ合はるるにわれは諺言なくなく妙く通事
よりまゝいふぬまゝおとらるるに諺より曉て御路の夕立の口をさし
をせり若くは信長吃交りて終ふふ是れ別根水原正久秀之久秀中りるハ
と云ふ此越王我朝の形勢危しむて才と令して切せし君は何
新領あるに後とせ終ふ信長曰謀客の測りて形のみ一澤正押返
中りるにけし別根を記しとて此をさしよりたの言此岨を傳ひ難
と雖も別子軍陣と中へ兵出さるまゝ朽木谷へ掛り兵隊路へ開
かへおわゆる中りる信長曰元牛と云ふ世のひ我思しと思ふと朽木谷
は朽木河内守元信筆城をり 南時朽木信俊守三万
二千石丹波福知山 渠は信長は余流之
我義昭將軍の爲に信長と親して終ふ亡き 渠何そ見と懐しと思

いんや終時の形も亦の幸と防光に必定と云ふ 松永之某朽木は
改令れ文あり秋立越何卒まじしんやきん若し朽木同心の元色
なくいぶかり川祖渠と云ふ遠く市之去かゝる時刻は終ふ年別小血
時極むむつし某及手は信んけ方へ入る終へて是より推すの端度け
たが軍を傳ひつられ根不便り或は是石おつと付危角難難辛若
して漸くそ日のまれば別子種語へおわたり形て強正は信長のあふ
流き、某是より朽木谷へ越へる此上別小取りて立防多し別久
秀命令と爲せしと思正昂時小市人教へけ街をたへ向て押さる終ふ
屋一朽木は城地ふは尤大將討られ城下は定て表動し中
君を押さるるにむる若あはし終るは易く波阜る表へ立防せ
あふへし又朽木随ふ不流ては是そ君はは合せて終るは心易く市

吾も亦もいふ事して遂にぬ 信長公は道徳少は皆田修理亮傳
内務分前田又登の森屋新又森之屋の垣井右近 市橋九郎の信長
古在傳の傳中は大略不致河田も九毛兵庫左佐久右左尉時常不
親、然もして抑さる思ひもよる尾崎より後地中も抑へし其
玉福喜の如く死きて信長公はあ神中するとの言はれり其時
面しきハ曲者遊さるやうな人教を不知して世をさすち其の言を據
て尋探さる元元より事同知る吾信信は事も知らるるせり
然如く何しての誘引さる 松永海兵衛は朽本河内を元信と信長
兼止し信長公は目見せり ぬりりり右信長悦新大形あり其
常路開り有朽本も多し川出物揚り別心易く波阜人帰城者
○ 其後或時 祿悲波阜へ入せられ其後小老人者を信長公

公少は老人の存者す あれ徳見知終一世上の人れりさるる
之と交と被る者ありし中一ハ一人の好しを公言 光源
院屋と録さす中二少はさ身れ命を道山人こそ我あり通ひ
一人の好を責さし中二少は中教の大佛殿を焼拂る者さ
ハ取の悪逆を信る者ハ取愛中ありし終し其後知りし川合さ
公も再挨拶小村の事ありし成山へも 流石寛仁の君ありゆへ
松永の心腹を死せられ其時面あり存へしこそ其時と立せ終
へて松永の例へしせられ元元の義ハ道中承りたる 松永も其
以也 凡前せり矢とさる誰ハ道中ハ小ハ此れを争ふ者ある及何
事ありてもされ候くおはれ有朽本ハ戯れを信せし必し是を以
心止ありましと再挨拶いと其時あり有 松永も其面あり

なる面を専ら敵公の徳仁心を仕合へて挨拶して退却せしむ
夫より公ハ渡村へ入せしれ何ぞやん此れもあきこさせしむ
酒井忠次亦挨拶の申候を伺きしより公曰されはよけ交
は阜北城まで退却せしむ者一之を子細ハケ候く我傳ハ少
信長先手進江路より難儀の時久秀既ハ一合を控て忠告せし
終多信長のケ候の件人君ハ此も振寄ハ使や久秀ハクハク
し然レ信長のケ候ハ此後と成りてハ信者しや夫より此ハ信
長之見ハ去蟻蟻焼口の茶屋と申すより松永を憎まれり
初て酒井信前も長政ハ朝倉之謀ハ合を信長と討んとせしむ
久秀思の如シ信長朽木谷と申候て夏波玉へ引返り
しより大木登りしと申す者もて此もあきらめしめてハ定て信長

眼背體ハ入て進ハ大軍を傳して尚玉へ妻來のハハ
の要害ハ人数とて防戦用意候へしと評定して本村青
之ハ希尾兵庫隊之敵前軍京の方ハ申すハ信長既ハ赤
北園と道ハ夏波の玉へ下志しハ退却尚玉へ礼入し
唇を以て齒を以て中申しハ尚玉ハ加勢と成りし
小要害を控へて関ヶ原表も申すハ申すハ仍て朝倉
心と同心して朝倉之武勢を以て子余務深しハ言表ハ
江別と波別の境ハ山并安小要害を控へ敵軍之勢
を以て申すハ関ヶ原長亭朝小要害と控へ城ハ
尚年ハ歳を以て申すハ申すハ申すハ申すハ申すハ
と申すハ長亭朝の申すハ申すハ申すハ申すハ申すハ

城小横山の城を築く三田村を乃ち大木秀俊大木本去休も決定形村
 紀後守由元口兵庫次郎次四人を大将として築きつゝ、平徳政の
 江北の通路を断る塞りしを、平信長が
上徳澤正大野
正四位下三十歳 平信長が
 幸てこゝに陣ありしに、老臣と集めて軍議を評定せし、道江を渡入
 りんて、欽しあふ小湊井長政を院不要害と推へ、加西を引渡りたれ、
 頼久、美濃し難に依り、増延川有るを以て、背懐深きりし、本下
 嶺を命し命し、極く調界不及り、本下又竹中半信尉を謀り、命を
 堀河邸の家臣を命し、命し、味方小引合れり、本城の要害を
 因小宮北近より、堀河邸より、道江を引渡り、然るに江北を渡り
 便し、元龜元年六月十二日、不出陣の禍有る、門十八日、小数百騎を
 引率して、江北やい、村小本陣と居たり、翌十九日、信長公進智

小姓僅五六人、百連夜に横山の城に根柢表、果一と小巡見有、要害尤
 能城子、中、信長公、後、北、根柢子、小あふさる、本横山の城に、押寄は
 降、集、堀河、人数、小、水、陣、下、陣、信、元、織、田、上、陣、命、信、包、丹、羽、本、在、是、長、秀
 と、張、寄、れ、ま、す、小、引、合、れ、し、平、信、長、が、押、出、し、淺、井、小、一、槍、付、合、死、せ、し、ま、人、数、を
 獲、出、せ、し、一、番、小、坂、井、左、近、藤、三、左、衛、門、ある、二、番、小、室、田、信、一、左、衛、門、亦、後
 到、五、之、番、小、市、橋、九、左、衛、門、佐、及、六、之、番、小、大、橋、不、破、河、内、守、九、之、番、小、兵
 隊、以、四、番、小、作、人、百、左、衛、門、尉、螺、谷、吉、左、衛、門、築、田、出、陣、中、條、將、監、又、番、小、
 信、長、公、將、命、を、換、炮、と、呼、ぶ、小、組、合、令、を、上、陣、也、と、呼、詰、哲、陳、云、
 て、小、宮、北、根柢子、を、何、れ、と、大、軍、也、と、告、げ、ん、小、宮、より、一、人、も、人、數、出、さ、り
 ず、平、信、長、下、命、を、傳、へ、淺、井、の、兵、也、と、小、宮、に、さ、る、を、平、信、長、公、押、
 寄、り、せ、し、一、人、も、不、殘、燒、拂、へ、下、命、あ、れ、元、より、さ、り

切らる織田軍兵多し不押寄被りしを農家町屋此居別もかく
敵も焼きたる後井長改言樽井より遠くは焼きたる士大將相以
おと迫りて云々の信長定て尚城へ押寄町にこそお破りし根子と
伺ひて是時小高城へ攻めんと計へし是時水取り城中の虎口へ城
いふも夫も持守め町家をもお破りし新具と奪んて敵の傷れ
多めると合意して城より必死を命じて出て出まらざる小高は
敵の先陣必殺軍共一陣破れて強黨全くと先隊の軍兵共
二陣へ破りて逃がらば定てう返さへ後へし是時信長人数と揚て二軍
軍中へ取て区一戦せん人数と深き方田川迫急に極めての要
害ありて是時少は軍兵来る事阿比事時小高は難不切而も返詰
く是も不御く兵使供小泡吹せん之下知せしは事一も家老の面々

織田軍此去勇小僻易して河を挟へて中川の史に散ての浦も立と覚
ゆき多し大軍一隊の組合は事とくよせ加る極難味方後的小
勢ありて城中より切て出何そ勝事此は先以交の城中と望も不指
かよ女義高此出陣と待交后探合戦の待利敵者へうはと事て回
心せさ系依り老改も論事かくして折る多去不信長公小高山城
正面を背山へは佐友高多の板井右近母友新玉市橋九左衛門塚本
小大猪不破河内守丸毛兵衛隊小高勢八子余人を援けて居也り人数
と立事小高山城西を昭る事長へは柴田修理亮内友居助信長内
務介前田又左衛門林新三郎持輝へ小高北東木又尾長は森之左衛門
首領九左衛門福富平左衛門築田出羽守木下友春弁押寄るも信長
公の陣は虎内前山小高へらぬと女以事配者へ小高を焚焼丸入

町屋くを打破り掛り思煙を立て焼く小谷勢赤てや出ると
清より天城中は少も掛り歸り返り居りり此西尾上東
ハ小室瓦生を焼立りり此勢を夜ハ矢清勢小陣隙を潰て居
たりり初て長政ハ城門小立ては極子を足り此後老臣を拓て中
されりり家今日ほりりと敵ハ極子を奪る小唯苗城ハ威と本日の
此中て左圍て攻め合勢ひ部一終りハ明本ハ少は未明より考多
人数引揚て横山表へ引入今一を勢半分矢清表へ引入時苗城ハ
清ハ大志と將として若者少百人引出矢炮を打込今一味方小
勢而れハ考多掛り引上へし是時清井を奪小一子余人換けて
初を暮りりむへし信長苗地と近附の後夜ハ森ハ守固り勢
へしは考多ハ軍小巧者而れハ能勢を足合を立て返り一三三三三

突掛らん是時我ホ二三子此勢引率してむりりと合身物而るハ
切崩さんハ必定へ考多ハ引入る勢而るを端止る事ハ成屋らり
昔より大軍ハ崩除ハ端歩難能なる事ハ必右往左往不礼るへ
し苗地ハ必死ハ切先と追立り横山道を照落しハ所ハ附
城ハ考多も中合へし是時小は信長と討取ん事ハ一奪小阿り
若考多泣して味方の軍小及ぶハ我ホ運命見しと思ひ
極り討死と追へし考多最後の供して流り水と席を赤て下知
考多清井を奪取清井石見与赤尾買作与詞を搦て中りハ
清勢ハ敵を官取在考多ハ今も敵前ハ相倉屋近苗不ハ出張
村沙流ハ只今味方小勢少ハ危き戦を好む人より勢清せぬて
相倉屋と一不不為て中合戦終へしハ清言ハ長政を収て曰ふ京

早速出らぬ物おとす面々申如左之候合テ誘表又退口と云
考ふ申候信長の武略十合一も有候義宗之信長ハ其果テ將
なれば横山の城と攻落し尚城へ押寄候義宗大に丸圍れ味方
の官方ハ其ハ弱夕へし其時め河小梅ハ其是也とし明方の軍ハ
其小梅テ受申之ハ一節ハ思切らば横山小見申ハ小依テ三人
席と遊ぎ面々其腕底ハ小連テ其後ハ本村田向川尾三河等
中流家名ホ下申事社政ハ其領へ移テ其こトハ社政等モ其志
長政の方へ移りて長政小向明ハ味方人数を出し戦ハ其申
す一併信長數百ハ其極勢ハ味方退立られハ必定之信長付入
小せ付城と奪れ候事疑ふハ今信長義宗と其領ハ其極勢ハ三萬
有ハ其時并出一戦と云へし者長政守テ其意ハ小ハ其ハ其義宗

早速出はせ出まし是れ明日の一戦ハ其能死候小其尚ハ其申社政の曰
出り其略をわし先候味方ハ社政小但せられし者其小其留らる申
長政も其難く候るを止められり候時其意ハ其意を其出長政公
信長小其り受へハ社政公ハ其前少テハ其難ハ其尚家ハ其運を
其手取ハ其存ハ其家ハ其大の腰抜其見小其合其意ハ其明方其人数之進
められ信長の引口退落討方中其ん云社政怒テ其意を其退立られ
し其も初テ虎市前山小其信長公社老臣と其集め小其城を
攻へ其も其や其評議者其久其も其申出テ小其を攻ハ其政其意ハ其極勢
其味方其人数多く其極勢ハ其又其前其義宗其後其意ハ其必定之其上
四方八面敵の小其初ハ其敵四方より討出候ハ其味方其申及ハ其
市人数と横山其引上られ其其申其申中其依テ信長其小其心者

昨日二日法野意横山表へ引九らる。後夜、佐、築田中系、小旗、炮
五、百、校、弓、矢、指、張、お、備、へ、い、退、口、浅、井、必、討、出、へ、い、思、悪、考、て、い、ま、六、を、
退、已、深、入、を、後、悔、し、て、信、長、公、も、自、才、小、姓、即、言、勝、計、し、て、矢、指、の、事、
小、旗、馬、と、ま、り、れ、本、林、け、築、田、も、後、降、へ、敵、喧、言、お、ハ、助、合、せ、引、揚、す、と、
大、寄、附、西、の、方、小、旗、り、法、野、川、入、り、如、小、旗、兵、少、し、自、暮、ふ、ま、い、も、
元、より、信、長、此、兵、討、立、并、立、退、取、お、別、に、如、り、り、初、て、日、廿、二、日、横、
山、此、城、を、攻、へ、さ、り、て、既、小、旗、と、定、ま、る、先、親、言、扱、め、只、は、築、田、
法、野、を、築、田、出、取、す、市、橋、九、下、虎、の、磯、田、上、册、分、同、九、市、小、の、方、大、同、扱、
へ、本、林、之、危、を、不、波、河、内、も、首、言、九、を、是、西、南、へ、本、下、後、言、市、氏、家、常、隣、女、
伊、賀、伊、賀、也、稲、葉、伊、藤、也、本、陣、ハ、四、方、と、又、後、し、下、急、有、へ、と、説、く、
白、果、の、先、け、山、小、旗、へ、ら、れ、下、四、方、考、ま、二、万、五、千、余、勝、稲、麻、竹、葦、之、也、

圍、之、圍、り、て、叫、び、て、責、ま、る、本、城、中、も、命、を、惜、ま、ず、防、務、ハ、務、多、考、
る、ハ、月、小、旗、も、大、軍、を、取、た、ま、政、の、方、へ、仗、を、い、後、巷、し、て、後、つ、合、し、
敵、小、旗、伊、賀、也、信、長、出、法、の、時、小、旗、政、より、史、之、の、報、常、報、倉、へ、出、馬、
此、城、中、を、下、れ、九、大、寄、附、出、法、の、沙、法、を、な、り、長、政、亦、て、出、人、を、せ、
場、小、旗、長、の、陣、を、堅、く、し、て、小、旗、後、巷、お、小、旗、小、旗、立、籠、り、ま、は、
安、平、於、此、居、り、る、横、山、此、面、より、急、に、後、詰、せ、れ、此、小、旗、自、
後、城、小、旗、及、へ、と、云、送、り、小、旗、後、つ、小、旗、不、及、と、先、味、言、小、旗、を、
自、今、と、て、長、政、多、勢、ハ、千、余、人、と、引、率、し、日、廿、六、日、小、旗、と、出、て、大、寄、也、
山、へ、打、上、り、り、り、如、小、旗、前、より、朝、倉、強、三、市、系、恒、之、大、將、と、し、て、
一、萬、五、千、余、人、と、引、率、し、日、廿、六、日、小、旗、へ、急、陣、を、法、井、長、政、ハ、孫、之、
市、系、恒、小、旗、前、より、朝、倉、強、三、市、系、恒、之、大、將、と、し、て、後、つ、合、へ、

若し信長は江別へ出陣の次は福富を在馬門を以て祢志へ加勢せ
る事の中より福富は石川伯耆守教正と弟面して淺井父子
約を背て胡合ふ一味を以て眼散せん為に交迎兵へ出陣及ゆ
淺井必胡合ふ加勢せし事の中より義宗出陣不及りんは必定之
危あり戦ひ必難儀なりん徳川家此由助力を乞ふるに之者
少なる石川島福富と弟面して浅井に討せし事をも後生たる
忠次是と聞て以て教正令を誘表しして信長の表裏の振舞
是即令に交する事あり故中より尚家を控教しおせし
り此尚家此武畧も信じて其困を道通より信に何そや再ひ
初め此面皮の厚化以上を以て道通や免角君も誦云して其
有人事し信長へ出陣の口上中上兼不存の報一し小信云

若し此事を信長怒て市中遠り山を去回家に市合侍は控由陪
者も其もあらず不是事の中より公問右中如一理者も信に
大信長既小控教し者もせし者者一我も方へ使とて
信長此命を傳へしは織田家の道に互も非もやこそ上東玉にてハ
尚家此武畧を以て是を以て西玉北玉の弓矢を試たり事し此
け交戦者へ出陣加勢の義を幸北玉此武畧を伺ひ尚家の弓
矢も其も知れぬも出陣して手同心を攻め事とし浅井父子
も其も信に早速不引を以て十名を合戦も不及と強急も思ふ
け交戦井信長も其も必胡合ふ加勢を乞はん時時家形も
其も幸へ上方より花やも一戦して尚家の弓矢此風義をも知
しむへし上御も其も初より少の懐も信義を忘るる小西へ

後向の時ハ朝倉ホ一ツホあれまゝと傳め今又武田ホ一味せよと何
 事ぞ親子まらうと心と一致せしまりて他人あはれやや何事本日
 の厚文と一旦ハ怒小忘るへき終ハ我折きて江別へ出馬せんし
 欲るへんは若しおまゝに公庭定て感懐と思ふへられは左様存せむ
 面ハけ家の休之用へ我ホ一人ホても出馬して仇をハ思ふて領内
 へててハハハ所様嫌あゝりりり信て沼井石川ホ不迷惑して
 赤面へあうとホ前と退き別種男と使ハ所前へ出られハ公所様嫌
 よく早退ホ出張は頼有信出され退ホ出張は頼有ハ人教子
 余人後松より出たて廿七日申の刻計りホ江ホの坂田郡まで
 市馬と馳付ホ付時ホ多忠猪内後信成有人と百連旅ハ沼井
 陣場大家山より朝倉陣場と渡沮の地能ハ市見切掛られ

又よ、信長ハ此陣ホハ市馬と進めたる信長の初見ハ辰辰をホ信
 成ハ市出するホ一某處と某處とハ攻殺ふむハ沼井朝倉は
 良時ホ退き解ホカキエマとホて信者五月廿七日申の刻哲市ホ信者トホ退出
 ても信長ホ市陣ホハ又ハ入せりり信長座机ホかりてホ外を
 柴田信家ホ久信成と丹羽長秀明智光秀沼川一益池田紀
 伊守元助後信輝信長編ハ乳兄弟也木下秀吉ホ林之虎下成柴田出羽守
 不破河内ホ見ホホ十人初とてホ介市橋九ホ虎ハ氏家常陸女ト全
 首官九ホ福多平ホ伊賀伊賀守稻葉伊福ホホ五と徹田
 の應ハたホ列と向て畏る院ホ席ホホ多ホマハ一ホ席と設られ
 志流石藏田家ホ信者ホ末府ホハ市見ホもハ成りて信のそホハ

本下後吉市秀吉 神君此由様子と見て別席を立てて夏草と持参り
九比方宗田猪家の上座不少し時々宗へ持込徳川家の由席は此由
下座とてさうふ事なれば 信長は穢小徳川版由席と設き不肯
此振看目しへて由席と設へり下られり不依り 信長公は由席机小
押並て夏草と参たり 是秀吉合々湯養事
存出也設してあり 其時信長公は 神君を
向きられ 浅井朝倉二備を此の時方と 公と二多小別れて合戦
ありとて 公へ別座宗田猪家明智光秀のあ人と由先子小中身へり
まゝ二陣小由備と由下知者へり 殆どへりて者りり 神君の依り尤合戦
の習先陣此れかの時と二陣して軍配の取不依り 必猪利小夏
物あふは宗田明智小先陣と後し 主二陣小由備は々由加勢として
出勢政せり 甲斐とて 幸なれば 浅井朝倉の依へ先一方とは

其の一事を以て切筋 由目小掛へりて 存り何れか一方へ先向座へて 依の時
池田紀伊守暇といふ事をも 神君小向て 尚家の尾刃に半玉より今
十五をよこ入れり 己人の事在家形の前にも 人並不猪まはり先陣の
若ハ先陣して 敵と切筋 ちら後座小二陣小越させ申す 小い事しゆと 俣
なく 甲上より定て 神君由立脈より 又へり 知不完尔と 折突ひ
ぬひ弓矢とて 戦場へ向ふ若ハ 時もたれ小方交相して 由旗扱有
公は附初て池田
小由備面あり 信長公は 色なりて 紀伊守小向せられ 尚時の良物徳川
及へ向て 之れにて 遊退けり 公小向ひ 終る 徳川家の 浅井の兵と 遊退
し 終る 我小ハ 越前勢とて 攻之と 信者 公ハ 事より け 夏の一戦小大功
と 互四海小武威と 輝り さんと思召られ 早速小 依者小 及せられ 別
座 宗田へ 由は 持り 知不 又ハ 信長公より 毛利助助と 依り 中せり 終る

浅井の自玉といひ人数大軍をいへ一備して、惟り小勢をへたふ人数
指すか勢小くして中流にても由る事いへて位難きなり 公別助也
古され由返り小某け安由か勢を信人たふ是と余いへたふ水火の
申加た禪退の及中へうり後上浅井大軍をたても某々手勢計して
中流へくはても安この禪退被も却て安礼の由小い稲葉伴隆
守入道一疾と位修舟をたふと者り信長一疾小油小福たうと武
勇た安れ一徳川後油を安あふとけ者も命をさう 仍て稲葉其疾
神玉此中流へ乗上りて明日一戦の刻無勢の私何此中流はあま中
月安ゆは先自先の中も此を金たむ極ふ事然一 公別由對面有
て中入有たふとふ浅井の自玉と云ふ公子の太軍一我小はを路を押
来り不知案内の一辺に玉神又人数小勢に依て明日一戦は先未た

也と云え二陣小扱ふれ我小自先危きと見ゆら 横徳と入路
のふへて位あり一疾あり完ふと知い由先自と存ゆ位の上
後陣小備ゆへ一某由後小由止ゆへ一由心易思百ゆへ一いつる天魔破
白ゆへも折破り由同ふくけり中と廣云へて退ゆは されい前
神玉此中流を設けらるる一 及下後吾神此成立と為る不四代の
祖は後系氏一辺に玉浅井神の生れ山門小登り出家して昌盛
と号し玉極め多々僧之を乱神山小出て被老冥骨とゆふ小洋心
多と一は竹生流小五て福水被灌下向のたうと或人家小琴の音
ゆゆ五より難れ内ふ十七八の女あり是より心出家をいとむ尾別へり
是を信して神女と云ふ一昔農業を移むる子孫安の者さうとさ子孫た昌
吾の織田信秀の是怪一終小を以指被秋の中細云といふ公家尾別春日

井郡西原新村と云ふ所に流されけり而して一人の娘を設けし後中納言

帰路者娘の母と云ふ尾別小法師十六歳して三女の貞人の孫と云ふ戀

ぬひ中間此荒者た云ふ合を去す而して夫婦と成る は時流あつた月小法師の如く存存も流世

ありりり 一人女子と云ふ尾別海西郡乙子村 又荒子村とも 百姓源助の妻と云ふ

世孫助の後三佐法第一路 其次小男子と云ふ天文五年丙申正月元日卯の二天小

と云ふ子ハ別秀次あり 誕生左日吉と名付く父の源右の孫抱小南り死を依て後家と中村

筑阿孫小娘と云ふ初め日吉と名付し後小我実子小筑出生を

小五郎源從五位下丹波守 故小筑阿孫是と云し日吉と云ふ光明寺と云

秀吉と云ふ和泉紀伊大和七族名取 禪寺へ去る日吉十六歳の妻 天文九年辛亥 去と云てを別へけり此を別ハ

今川の依地抄昔久建城守松下を源尉之徳而用者引肩の城守飯尾

忠常と云ふ方へ移りし日吉と云ふ何思の者を同尾別の老と云ふ

松下云何左と云ふ事あり日吉と云ふ公の事と云ふ松下云然らば我小

從へしと別飯尾の方へは去来り飯尾小法師と云ふれ飯尾か

子は日吉と云ふ事ありて餘草子と云ふ事あり日吉能く懐の懐

懐か懐りぬ故懐懐と名付て字體と云ふ 夜而小法師の子體を 初て日吉

心小思ふ主人の身上丸と云ふ事ありて初め知れる事一夫夫戦ふ小

生れて量儀したる人やと大志を起し欠る事と云ふ何れは主人小抱人

と思ひ不孝公と云ふ事ありりり松下と云ふ此日吉教ふ不忠口しりぬ

松下世居是れして眺と云ふ 小瀬角唐の大園記小合を方と云ふ後小掃ケの體

任守事あり松下何を知年以新系系 又令と云ふ事あり 認事小云ふ後吾と云ふ衣履を初信長に

云老小及して去りて老小存と云ふ事あり まより 日吉尾別へ移り 名取久一若

世居して字體と云ふ事あり 世居して 後法洲の城據者諸坊の長吉と云ふ事あり

伊根悪者あり信長北下已れ何ぞあるらん之室を後者受け得
るに秋小の信長よと影小月割りして成務せしむ是怪と成行を集
るの中者孫小信と成成務を孫と
戦の時とさ此成務を指へる力ありて
尾別津清の清和又長孫娘ありふと云小密にして其女
力ありて武具を穿ふ此娘は孫云
小の政所永禄元年丙午九月朔日十三歳なり
信長は初て目見えし之後丹羽は其回の名字を世に羽柴と名乗
三十一日午二是より自孫と大將とありて

三河後凡古記正説大全卷十四終

又

